

山里海学共育プロジェクト 高知スタディツアー2025 報告書

2025年5月31日～6月1日



黒潮医療人養成プロジェクト



〔文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業〕

山里海医学共育プロジェクト



目的

- 災害対策が先進的な高知県や高知大学の現場を実際に見学し、知識と意識を高める
- 災害医療や地域減災 (Disaster Risk Reductioun: DRR) の現場で活躍する方々から直接学び、今後の活動に活かす
- 災害に関心のある学生間で交流し、ネットワークを広げる
- ツアーの中で協働しチームワークやリーダーシップを養う

会場 1日目 高知大学医学部 アメニティマルチスペース (医大ローソン2階)

〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

スポーツセンター津波避難タワー

〒783-0094 高知県南国市前浜 1 3 3 2 - 1

宿泊 高知ホテル

〒780-0053 高知県高知市駅前町 4 - 1 0

2日目 高須浄化センター

〒781-8123 高知県高知市高須 3 0 4



ハザードマップ

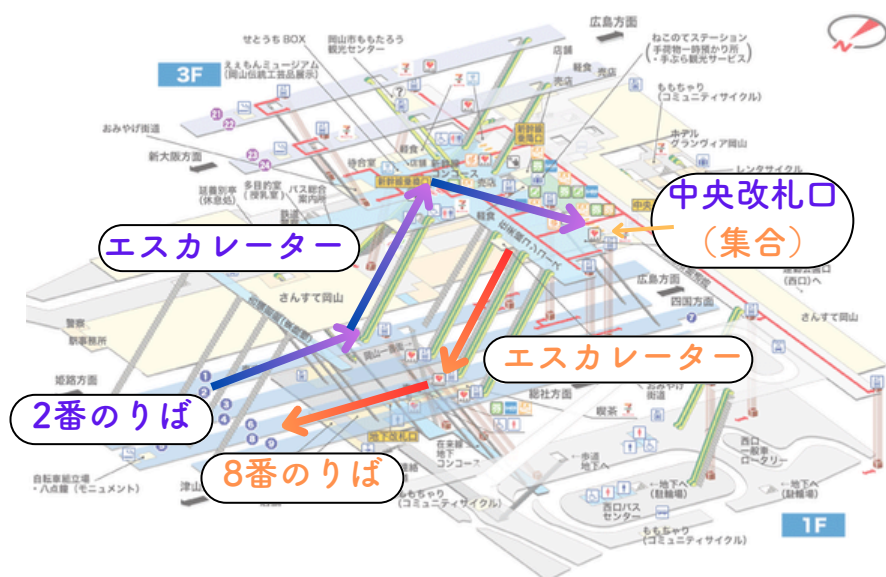


(津波浸水 想定最大規模)

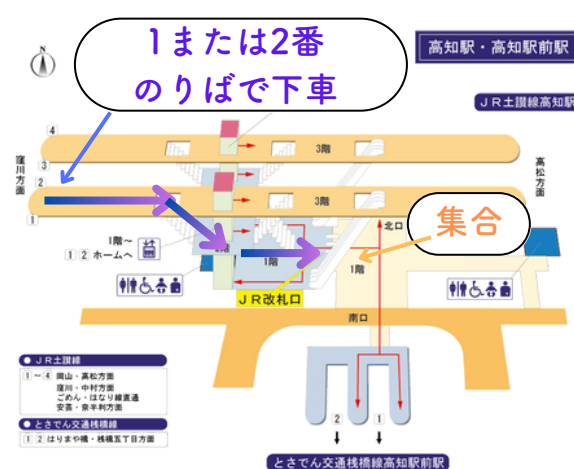
スケジュール (～高知駅まで)

時間	島根大学	鳥取大学	岡山大学	香川大学
0630	出雲市駅発			
0730		米子駅発		
	やくも6号特急岡山行			
0945			岡山駅集合	
0950	岡山駅着 (2番のりば)			
0955	岡山駅中央改札口 (駅構内) 合流			
1005	岡山駅発 (8番のりば)			
1013	南風5号特急高知行			高松駅発
				予讃線快速サポート 南風リレー号快速観音寺行
1043				多度津駅着
1048				多度津駅発
1229	高知駅着			
1235	高知駅改札口合流			
	ブリーフィング@高知ホテル			
1330	高知駅正面ロータリーから高知大学医学部バス出発			

やくも着(②)→集合場所



高知駅着→集合



スケジュール(1日目)

時間	行程			
1315	高知大学医学部バス 到着			
1330	高知駅正面ロータリー（コーナン店舗側）出発			
1350	高知大学医学部 着			
	アメニティマルチスペース（医大ローソン2階）			
1400	研修開始			
1405	4グループに分かれて演習			
	1	2	3	4
1415	A 無線	B トリアージ	C 三角巾	D ロープ
1445	B トリアージ	A 無線	D ロープ	C 三角巾
1515	休憩			
	1	2	3	4
1525	C 三角巾	D ロープ	A 無線	B トリアージ
1555	D ロープ	C 三角巾	B トリアージ	A 無線
1625	休憩			
1635	高知大学医学部 出発（バス）			
1700	スポーツセンター津波避難タワー見学			
1730	津波避難タワー 出発			
1755	高知大学医学部 着			
1815	懇親会@アメニティマルチスペース			
2045	高知大学医学部 出発（バス）			
2105	高知駅着			
2115	ホテルチェックイン、自由時間			

スケジュール(2日目)

時間	行程
0915	高知ホテル周辺 大学バス出発
0930	訓練会場 高須浄化センター 着
	自由時間
	フェスティバル会場を楽しんでください 南海トラフ地震や風水害による大規模災害を想定し、 消防車やヘリコプターなどを使った訓練を実施します。 起震車体験や住宅の耐震相談コーナー、飲食ブースなどもあります。
1100	訓練開始（第1部）
1130	開会式のため一時中断
1140	訓練再開（第1部）
1210	訓練振り返り・休憩
1230	訓練開始（第2部）
1330	訓練振り返り・休憩
1430	高知駅へ 大学バス出発
1445	高知駅着
1500	振り返り会@高知ホテル2階朝食会場
1600	解散

参加者

大学	学生数	教員数
岡山大学	13	2
島根大学	1	
香川大学	2	
鳥取大学	2	
高知大学	15	7
和歌山県立医科大学	1	
三重大学	13	2
合計	47	11

1日目レポート

無線訓練

参加学生は4つのグループに分かれ、トランシーバーを使用した災害時の情報伝達訓練を実施した。各グループで現場役と本部役に分かれ、傷病者の状況や現場の様子を正確に伝える演習を行った。トランシーバーの基本的な使用方法として、頭切れ防止のための一呼吸の間の取り方、「どうぞ」「以上」「了解」などの決められた用語の使い方、感度試験の実施方法について実習した。訓練では、METHANEレポート形式を用いて状況報告を行い、現場と本部間での情報共有の重要性を体験的に学習した。

学生の感想

伝える側では状況を簡潔にわかりやすく伝えることは難しかった。本部が聞いただけで現場の状況をイメージできるように伝えることが大切だと学んだ。聞く側では言われたことをすぐに誰が見ても伝わるようにメモに取ることが難しかった。本部は現場が情報を取れるまで急かさずに待つことが大事だと学んだ。またトランシーバーに慣れていないので、「どうぞ」や「以上」の使い方が慣れなかった。METHANEレポートに沿って相互の誤解が生まれない情報通信が大事だと学んだ。



無線訓練の様子

トリアージ訓練

START法を基にしたトリアージの実技訓練を実施した。模擬シナリオに対して分類訓練を行い、3枚つづりのトリアージ・タグの正しい記入方法、傷病者への装着方法、優先度に応じた赤・黄・緑・黒の色分けについて実践的に学んだ。また、歩行可能な傷病者の識別から始まり、呼吸・循環・意識の評価による系統的な判断プロセスを体験し、災害弱者（CWAP）への配慮についても学習した。

※災害弱者（CWAP）：

Children（子供）、Women（女性、特に妊産婦）、Aged（高齢者）、Patients or Poor（患者または貧困者）の頭文字を組み合わせた略語

学生の感想

患者さんの状態をすぐに判断し、区分分けすることは慣れていないと難しかった。呼吸数が何回以上以下だと異常なのかや頭骨静脈の循環不全徴候などの知識も持つことが必要と学んだ。トリアージで患者さんの優先度が決まるため、患者さんが容態を訴えてくる中でいかに冷静にトリアージできるかが非常に大切になると感じた。机のない中で筆圧濃く書くことは意外と難しかった。



トリアージ訓練の様子

三角巾実習

三角巾を用いた応急処置の基本技術について実習を行った。本結びの正しい結び方とほどき方を習得し、実際に腕の固定を想定した包帯法を実践した。学生同士でペアを組み、三角巾の正しい畳み方から始まり、傷病者の腕を胸前で固定する一連の手順を反復練習した。また、衛生的な取り扱い方法として、三角巾を床に接触させない管理方法や、結び目を傷の上に作らないなどの注意点についても実習を通じて確認した。

学生の感想

三角巾はトリアージや無線、ロープに比べると比較的なじみがあるものであったが使い方や結び方をあまり知らなかった。しかし今回の研修を通して、正しい結び方や注意すること、またそうすることにより生じるメリットを学ぶことが出来た。迅速に処置が出来るようになるために復習してしっかり身に付けていきたいと思う。

ロープワーク実習

災害現場で使用される基本的なロープワークの技術習得を行った。巻き結び、引き解け結び、自在結びの3種類の結び方について、それぞれの用途と特徴を理解した上で実技練習を実施した。特に引き解け結びについては、一方向への引張りには強いが、反対方向への引張りで簡単に解除できる特性を活かした災害時の荷物搬送における活用方法を体験した。自在結びでは、ロープの張力調整が可能な特性を理解し、避難所設営等での実用的な応用について学習した。



三角巾実習の様子



ロープワーク実習の様子

津波タワー見学

南国市内の2か所の津波避難タワーを見学した。最初にスポーツセンター津波避難タワーを訪問し、最大820人を収容可能な避難施設の構造と機能について詳細な説明を受けた。震度5以上の地震を感知すると自動的に防災BOXの鍵が解除される仕組みや、段ボールベッド、食料、毛布、災害用トイレなどの備蓄品の配置状況を実際を確認した。屋上に設置された太陽光パネルによる電力供給システムや、小学生でも利用できる階段設計、車椅子対応のスロープ設備について現地で確認した。続いて海沿いに設置された津波避難タワーを見学し、南海トラフ地震発生時の10分以内という津波到達時間を考慮して300メートル間隔で設置されていることを確認した。



津波タワー見学の様子

2日目レポート

高知県総合防災訓練フェスティバル

高知県総合防災訓練の一環として開催された地域防災フェスティバルに参加し、災害対策に関する体験学習を行った。地震体験車では震度3から7までの揺れを段階的に体験し、特に震度7の激しい揺れとその後の余震を身体で感じる事ができた。航空自衛隊が保有する大容量給水車の見学では、県内で唯一の設備について説明を受けた。災害救助犬とのふれあいコーナーでは、引退した救助犬との交流を通じて人命救助における役割について学習した。段ボール製簡易ベッドの体験では、実際に横になることで避難所での生活環境について理解を深めた。降雨体験装置では、1時間あたり10ミリの「やや強い雨」から180ミリの「猛烈な雨」まで段階的に体験し、豪雨災害の危険性を体感した。防災グッズ作成コーナーでは、ゴミ袋を使った簡易ポンチョと新聞紙を使った食器の作成を実習し、身近な材料を活用した災害時の工夫について学習した。その他、ペットの災害対策や災害時の通信機器のブースなどでも理解を深めた。



地震体験車



災害救助犬



簡易ベッド



降雨体験装置



ゴミ袋の簡易ポンチョ



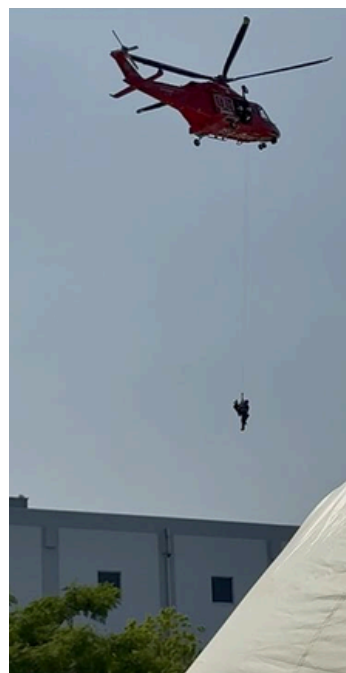
新聞紙の容器

医療訓練

参加学生全員が傷病者役として大規模災害医療訓練に参加し、実際の災害現場を想定したトリアージおよび医療救護活動を体験した。訓練開始前に各学生に傷病者の症例カードが配布され、急性硬膜外血腫、右胸部開放性損傷、骨折などの多様な病態設定に基づいて演技を行った。メイクアップとして、ガムテープとマジックを用いて受傷部位を衣服に表示するほか、外傷写真カードを併用し傷病者を演出した。訓練では医療支援班が連携して救護活動を実施し、学生は実際にトリアージ・タグによる分類を受けた後、それぞれの重症度に応じて緑・黄・赤の各エリアに振り分けられた。赤タグに分類された学生は救護所テント内でのより詳細な医学的評価を受け、黄タグの学生は経過観察エリアでの待機を体験した。また、最後にはヘリによるホイスト救助デモの見学も行った。訓練終了後には、学生が中心となり2日間の振り返りを行った。



医療訓練の様子



ホイスト救助デモ



振り返り後の様子

学生の感想（抜粋）

防災意識の向上について

「この2日間で一番印象に残ったことは、当事者意識の高さである。高知大学の設備や防災訓練の見学を通して、沢山の方々が災害対策に真剣に取り組まれていることを改めて感じた。」

「高知大学や高知県の防災意識の高さに驚かされ、感銘をうけると同時に、本当に将来南海トラフは起きるのだと恐怖を感じる2日間だった。津波避難ビルが、津波の高さだけでなく、予想到達時間を考慮して計算されて建てられていた点が、もっとも印象的だった。」

「大規模な防災訓練と避難タワーを目の当たりにして、県によって防災意識の高さが大きく異なることを実感した。また、防災意識を高めるためには、自分が住んでいる地域の地理の特徴を押さえておく必要があるのだと学んだ。」

「地震体験など普段体験することができない経験を通して、震災は自分が思っている以上に大きな被害をもたらすと改めて実感した。」

「初めて実際に津波避難タワーに登ったが、道路からながめているときに感じていたのとは違ってしっかりと高さを感じることができ、また設置されている距離を学ぶことができて、津波避難タワーの意義を実感することができた。」

災害医療への理解

「2日間を通して、基本的な防災知識だけでなく、医療従事者として災害時に果たすべき役割やどのように行動すべきかについて、より具体的に理解することができた。」

「災害医療は災害時に限った特別なものではなく、日常に応用可能な知識と技術が多く含まれていることに魅力を感じた。」

「防災訓練に消防士や警察、自衛隊や様々な医療機関が参加している様子を見て災害医療は多職種連携が重要であるということが分かった。」

「医療従事者の方たちと合同で訓練に参加することができ、実際の災害の医療現場を身をもって体験することができた。」

「災害医療は"診療科"ではなく"領域"であるから、将来進む診療科に関わらず、多くの医療者が学び、対応すべき領域であると考える。」

その他の気づき

「今回、他大学の学生との交流や実践的な防災訓練を通じて、災害時に求められる行動力や情報伝達のむずかしさ、情報処理の大変さなどを実際にトリアージされる側になることで、身近に感じられてとても刺激を受けた。」

「岡山県では災害医療に対する意識があまり強くないので、まずは大学の鹿田祭などで展示ブースを作って知識を広めることができたらいいなと思った。」

「岡山県は大規模災害への防災意識が高くないことを実感したので、学内や地域で防災意識を高める取り組みができたらいいなと思う。」

「当事者意識の強い高知大学、三重大学、和歌山県立医科大の学生と比較すると、やや災害の少ない山陰地方だけに手技や知識に留まらず防災意識の差を痛感させられた。」

「医療だけでなく、行政、地域、民間といったすべての人々の力を連携させて災害には対処する必要があるということを痛感した。」

「私は将来、国際保健や国際協力の分野で活躍したいと考えており、そうした現場には、災害対応と重なる側面が多く存在すると感じている。日本は世界的に見ても災害対策が非常に進んでいる国であり、今回参加した高知県の防災フェスティバルは、その中でも地域一体となった先進的な取り組みが印象的であった。」

「今回の学びを通じて得た知識や気づきを積極的に周囲に伝える機会をつくりたい。医療従事者を目指す者として、災害時に正しい知識と冷静な判断力を持つことはもちろんのこと、その重要性を広めていく姿勢もまた重要な役割の一つだと実感した。」

「まずは、高校や中学校など含む学生を中心に、勉強会というよりかは体験型のワークショップなどから災害に触れてもらう機会を設けたい。大学生や中高生にとって、他の地域の同世代がいかに防災への危機感を持って過ごしているかを知るだけで良い刺激になり『自分達も例外ではない』と、当事者意識を持つきっかけになるのではないか。」

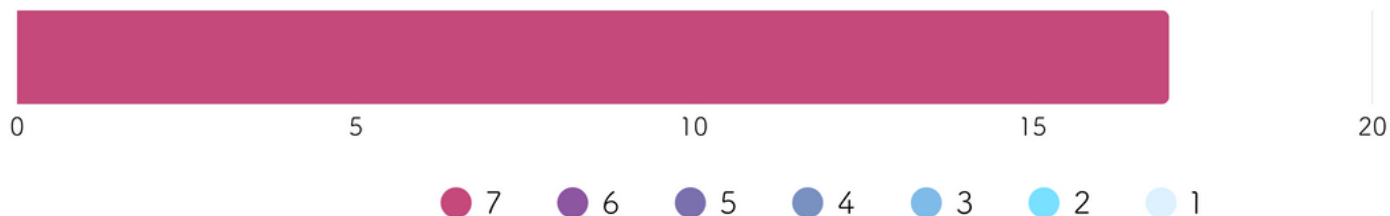
「学んだことは災害医療に対しては準備と連携が一番大切であるという点である。災害という有事の事態に対して準備がないと、実際に動くことができない。」

参加者アンケート

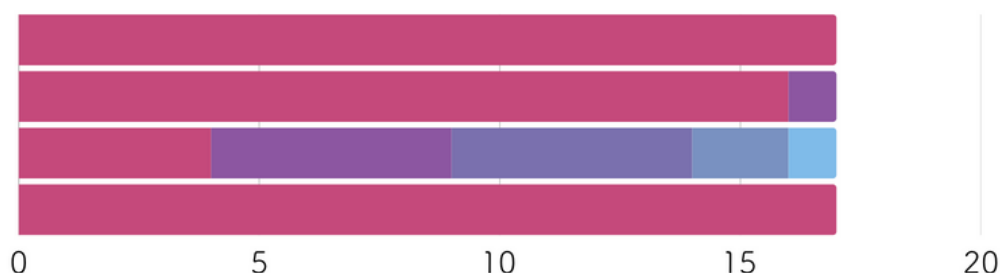
実習数日後～2週間後に実施、回答者 n=17/18 (94.4%)

今回のツアーの内容に満足していますか？

● とてもそう思う ● そう思う ● どちらとも言えない ● あまりそう思わない ● まったくそう思わない



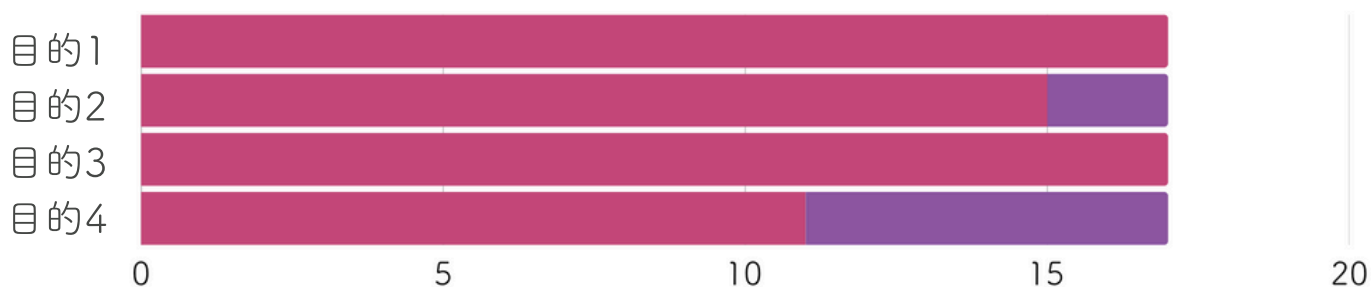
興味深かった
やりがいがあった
自信が持てた
体験して良かった



以下の内容についてお答えください

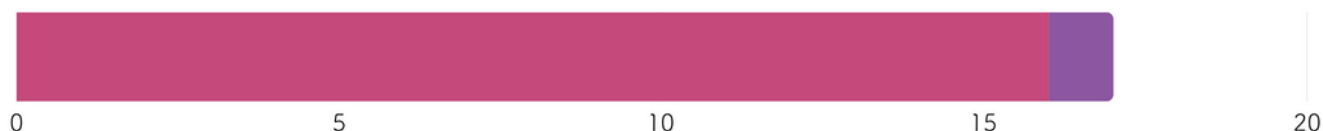
- (目的1) 災害対策が先進的な高知県や高知大学の現場を実際に見学し、知識と意識を高めることができた
- (目的2) 災害医療や地域減災 (Disaster Risk Reductiupon: DRR) の現場で活躍する方々から直接、今後の活動に活かせるような知識などを学ぶことができた
- (目的3) 災害に関心のある学生間で交流し、ネットワークを広げることができた
- (目的4) ツアーの中で協働しチームワークやリーダーシップを養うことができた

● とてもそう思う ● そう思う ● 思わない ● まったく思わない



同様のツアーが開催される場合、友人や知人に推薦したいと思いますか？

● とてもそう思う ● そう思う ● どちらとも言えない ● あまりそう思わない ● まったくそう思わない



教員の立場から ～本実習のねらい～

今回の高知スタディツアー2025では、「山里海医学共育プロジェクト」から岡山大学・島根大学・香川大学・鳥取大学の4校、「黒潮医療人養成プロジェクト」から高知大学・三重大学・和歌山県立医科大学の3校が参加し、学生47名・教職員11名の計58名による合同研修を実施しました。

山里海医学共育プロジェクトでは、公衆衛生学マスター養成プログラムの一環として実施しました。2日間のフィールドワーク実習を通して、学生たちが災害医療を多角的に捉え、理解を深めることを目指しました。災害医療は特定の診療科ではなく、すべての医療従事者が関わる可能性のある領域であることを理解し、ミクロなレベルだけでなく、地域ひいては社会全体を俯瞰しながら、地域医療に貢献できる医療人となることを願っています。

本プロジェクトの発端は、岡山大学学生からの「やってみたい！」という自発的な声であり、教職員はその意欲を後押しする立場として実現を支援しました。本プロジェクトの関連教員をはじめ、この機会を調整してくださった黒潮医療人養成プロジェクトの高知大学・三重大学・和歌山県立医科大学の関係者の皆様、およびスタディツアーに携わったすべての方々に心より感謝申し上げます。

今回のフィールドワークでの学生たちの積極的な参加姿勢は非常に素晴らしく、今回の体験が次の新たな挑戦への出発点となることを期待しています。

岡山大学学術研究院医歯薬学域
地域医療共育推進オフィス
香田将英





[文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業]

山里海医学共育プロジェクト